

った。逆にそれが藩によって拒否される場合もあった。なお、住職交代に際しては檀家が立ち会い、寺の什物や財産の確認引継をしていった。住職は財産を単独では処分できなかった。そして住職が信仰上などの理由で檀家から忌避され布施を拒否されたりして(例として宝暦年間などの諸例や延享二年の吉田村蓮光寺など)出寺する例も散見される。これらの事例では宗門改めの制約は檀中からは無視されている。また寺が経済的に困窮して破綻し住職が退寺する例も近世後期にはままある。これらも辻説の上下関係にもとづく寺院・僧侶像からはずれるものである。

仮説としてであるが、日蓮宗の寺檀関係は中世以来の伝統が中心として存続していたと考えるべきであり、後発のシステムとしての寺檀制度はその中核を変容させるほど影響をもつものではなかったのではないか、という観点から今後の検討を進めたい。

書肆・加賀屋善蔵と日蓮聖人伝の出版

堀部 正円

【一はじめに】近世における日蓮宗関係書の出版事情については、冠賢一氏によって詳細な研究が披瀝されている。とりわけ、「法華宗門書堂」を名乗った村上勘兵衛については、寺院や旧家所蔵文書によってかなり詳細な動向が描写されている(『近世日蓮宗出版史研究』など)。しかし、日蓮宗関係書の刊行が数百点に垂んとする中で、村上勘兵衛以外にも多くの書肆が関係している事実が存する。本発表では、その中でも江戸時

代後期に活動が見られる書肆・加賀屋善蔵について、特に日蓮聖人伝の出版事情を概観して、同書肆を研究の俎上に載せることを第一の目的とする。

【二加賀屋善蔵について】大坂の書肆・加賀屋善蔵は、堂号を松根堂といい、本名は吉田姓である。加賀屋善蔵についての先行研究は皆無であるが、『日本古典籍書誌学辞典』には「加賀屋善蔵」の項目が存在し、簡潔ながら解説されている。内容を箇条で列記すると、①出版は天明以降②教養本・宗教本が多い③所在は数回の移転が見られる④明治四年頃が最後の出版、との指摘が見られる。このうち改めておくべき内容として、④は明治以降も「吉田善蔵(造)」や「加々善吉田書店」などとして明治・大正時代に出版された書籍が多数確認されるほか、湯川松次郎氏の調査によれば、明治末年頃に心斎橋筋備後町での店舗の存在を伝えている(「明治四二・三年頃の心斎橋中心の大阪の本屋」)。もう一点、新たに指摘しておくべきことは、多くの日蓮宗関係書を刊行していることである。近世初期の「法華宗門書堂」は前述冠賢氏の研究によって、村上勘兵衛ら四書肆による経営が指摘されている。後には村上勘兵衛単独で「法華宗門書堂」を名乗るが、例えば文政五(一八二二)年刊行の『温泉遊草』には、「法華宗門書堂」に加賀屋善蔵も併記されている。加賀屋善蔵は多くの日蓮宗関係書の刊行に携わっていることが確認されるが、これらは概ね村上勘兵衛との相版によるものである。筆者は加賀屋善蔵による日蓮宗関係書の刊行については、村上勘兵衛との密接な関係が背景にあったと考えている。

【三】加賀屋善蔵による『日蓮大聖人御伝記』の改訂・出版概観】延宝九(一六八一)年刊行の『日蓮大聖人御伝記』は、四版の刊行が確認されているが(拙稿「延宝九年刊『日蓮大聖人御伝記』の成立をめぐる」参照)、そのうち三・四版は加賀屋善蔵によって刊行されている。『文化九壬申歳改正板木総目録株帳』(『大阪本屋仲間記録』十三巻所収)には、「日蓮御伝記十 加善」とあり、文化九(一八一二)年にはすでに加賀屋善蔵が版權を所持していた。文化十三年には前版に手を入れずに刊行しているが、天保十四(一八四三)年には改訂版を刊行した。詳細は既に報告済みだが、相当数の訂正と頭注からは、日蓮宗関係の寺院や人師との関わりが必須と考えられる。ここからも、相版の書肆・村上勘兵衛との密接な関係性が想像される。

【四】加賀屋善蔵によるその他の伝記書の刊行】加賀屋善蔵は、『日蓮大聖人御伝記』以外にも、『高祖累歳録』や『高祖大士真実録』、『日蓮聖人一代図会』などには相版の書肆として名を連ねている。積極的に日蓮聖人伝の刊行・販売に携わっていた事実が知られる。

【五】小結】本発表によって、まずは書肆・加賀屋善蔵による日蓮宗関係書、とりわけ日蓮聖人伝の刊行事情についての紹介ができたと思う。今後は、加賀屋善蔵の総体的な出版活動とその中での日蓮宗関係書のしめる位置づけ、またその他の日蓮宗関係書を手がけた書肆の動向などについても検討していきたい。

長松日扇における教化活動の一考察

——本尊授与者をめぐって——

武田 悟一

安政四年一月一二日、京都において「華洛本門佛立講」を開講している長松日扇(清風)へ(一八一七—九〇)は、本仏釈尊の悟りの世界である法華経、それを顕揚している日蓮の教えである本化別頭教学、さらには八品門流の祖慶林房日隆の教えである本門八品教学を継承している在家者として知られている。その教えに立脚している日扇は、いかなる教化活動をしているのであろうか。

ところで、日扇の安政四年の開講から明治二三年の日扇死去に至る三四年の教化活動に注目してみると、信徒が日常における信行の礼拝対象、信仰のあかしとしての曼荼羅本尊を、日扇みずから染筆し信徒へ授与している行為が見逃せない。そこで曼荼羅本尊の授与に視点をあててみると、日扇は本尊に佛立講の講中の名前、あるいは日扇の弟子の名前、あるいは信徒の名前を明記していることに注目できる。この授与者を分類し整理することによって、日扇が授与者に対する信仰的教導の一側面が明らかになると考える。以下、曼荼羅本尊に記されている授与者について分類整理し、少しく検討してみたい。

さて、日扇が授与している本尊は、御牧日勤監修『佛立開導日扇聖人御本尊集』(平成七年)によって知られ、八八一点を収録している。さらに筆者の調査によって確認できている一点を加えると計八九二点となる。試みに八九二点を調査の対象として、授与者について検証してみると授与者が確認できる本